

## 平成29年度研究開発実施報告書（要約）

### 1 研究開発課題

社会の変化に対応し未来を拓くために必要な「思考力」を育成するための新教科「未来思考科」を位置付けた教育課程，新教科の指導内容，指導方法及び評価方法についての研究開発

### 2 研究の概要

本研究では，社会の変化に対応し未来を拓くために必要な教科等横断的な思考力を育成するため，第1～3学年に各教科で育成された思考力を束ねて，強化する新教科「未来思考科」を新設する。クラス単位で行われる未来思考科の授業で自らの思考や活動をメタ認知的にとらえる力を育成するとともに，既存の各教科（以下「各教科」とする）の授業や総合的な学習の時間における探究活動においても未来思考科との関わりを意識した授業や活動を行うことで，各教科，総合的な学習の時間で身に付けたい力に関してもより効果的・効率的に育成することができるようにする。先行研究の成果を生かした実践を通して，未来思考科を位置付けた教育課程，中学校学習指導要領「未来思考科」，指導事例集，評価規準表等を作成し，学力調査やアンケート調査，外部評価を踏まえながら，将来の中学校における「思考力」を培う教育のあり方について提言を行う。

### 3 研究の目的と仮説

#### （1）研究仮説

現実的な課題について意図的・限定的な問題発見解決，創造，メタ認知の活動を行う新教科「未来思考科」を位置付けた独自の教育課程を開発するとともに，各教科や総合的な学習の時間においても未来思考科との関連を重視した活動を工夫し，学校全体で取り組むことで，後に述べる三つの効果が得られ，社会の変化に対応してよりよい未来を切り拓くために必要な力を育成することができるだろう。

- ① 汎用的な資質・能力である「思考力」を育成することができる。
- ② 各教科の知識・技能や思考・判断・表現力を統合し様々な文脈で活用することができるようになる。
- ③ 21世紀をよりよく生きるために必要な現実的な問題について既有力を活用して判断する経験を通して，自らの生き方や社会の在り方について考えることができるようになる。

#### （2）教育課程の特例

##### ① 新教科の設置

必修教科，総合的な学習の時間の時数を削減し，新設教科「未来思考科」を設置する。未来思考科は社会の変化に対応し未来を拓くために必要な教科等横断的な「思考力」を育成することを目標とする。第1～3学年で行い，より効果的な課題解決の方法を学ぶ中で「思考力」を育成することを目標としてクラス単位で行う。

平成29年度以降の授業時数は以下のとおりとする。

- 第1学年：35時間（1学期：10時間 2学期：15時間 3学期：10時間）  
 第2学年：35時間（1学期：10時間 2学期：15時間 3学期：10時間）  
 第3学年：25時間（1学期：10時間 2学期：15時間）

##### ② 既存の教育課程からの変更点

- 第1学年：必修教科から15時間，総合的な学習の時間より20時間を削減し，35時間を確保する。  
 第2学年：必修教科から15時間，総合的な学習の時間より20時間を削減し，35時間を確保する。  
 第3学年：必修教科から5時間，総合的な学習の時間より20時間を削減し，25時間を確保する。

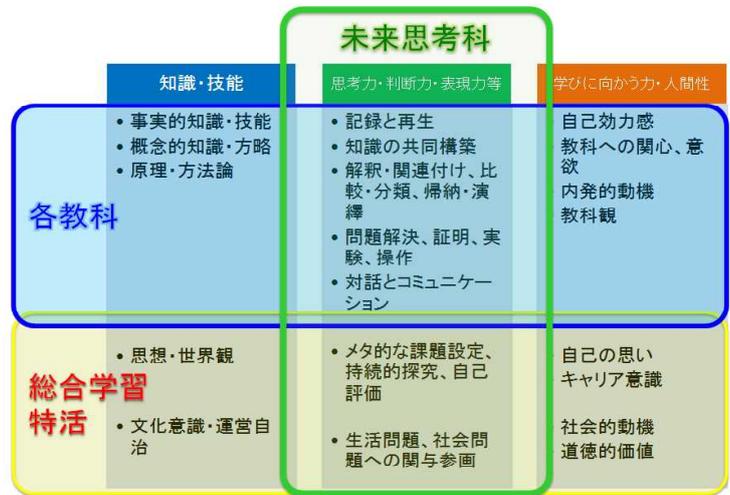
学習指導要領等を分析して教科等横断的な「思考力」の育成に関連する項目を洗い出し，各教科の授業で学習する内容を整理し，未来思考科で学習する内容と関連付けることで，教科の学習時間の削減によって教科内容の不足が生じることがないようにする。

## 4 研究内容

### (1) 教育課程の内容

#### ① 未来思考科で育成する資質・能力

本校が考える「思考力」とは、「一人一人が自ら学び判断し自分の考えを持って、他者と話し合い、考えを比較したり吟味したりして統合し、よりよい解や新しい知識を創り出し、更に次の問いを見つける力」としている。そして、この「思考力」は、今回の学習指導要領改訂のキーワードである「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善の核となる育成すべき資質・能力であると捉えている。未来思考科で「思考力」を育成し、各教科で「知識・技能」を育成するという分担した考え方ではなく、未来思考科と各教科と総合的な学習の時間の三者が不足する部分を補い合って核となる「思考力」を育成し、相互に高め合うという考え方である【資料2】。また、未来思考科では、育成する「思考力」を次の3つの要素からなる力と捉えている。



「今求められる学力とは—コグニティブシーベースのカリキュラムの光と影」日本標準ブックレット、石井英真(2015)より一部引用

【資料2】 育成すべき3つの資質・能力とカリキュラムの工夫

#### 要素1 「論理的・批判的思考力」に関すること

- (1) 比較・関連付けなど
  - ア 比較したり関連付けたりすることができる。
  - イ 組織的・体系的に考えることができる。
- (2) 理由付けや判断力
  - ア 状況に適切な理由付けを行うことができる。
  - イ 情報、証拠、見解を効果的に分析し、評価して判断することができる。

#### 要素2 「問題発見解決力・創造力」に関すること

- (1) 問題発見解決力
  - ア 問いを発見することができる。
  - イ 問いを解決するプロセスをデザインし、実行することができる。
- (2) 創造的思考力
  - ア ブレインストーミングなどのアイデアを創造する広い手法を活用し、アイデアを開発し実施することができる。
- (3) 協働による創造力
  - ア 集団的なインプットとフィードバックの活動を活用し、失敗に学びながら新しいアイデアを開発し実施することができる。

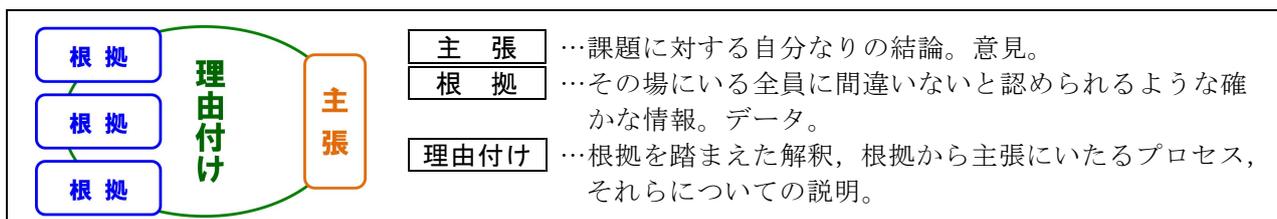
#### 要素3 「メタ認知力」に関すること

- (1) モニター力
  - ア 学習課題を解いている相手をモニターし、問題を見つけることができる。
  - イ 自分自身の課題をモニターし、問題を見つけることができる。
  - ウ 学習課題を遂行するプロセスをデザインすることができる。
- (2) コントロール力
  - ア 効果的な学習方法を自分自身で決めることができる。
  - イ 学習の状況を調整することができる。

なお、これらの構成要素は、学習指導要領の指導項目のように同じレベルの項目が並列しているわけではなく、要素1と要素2が並列の関係、要素3は要素1及び要素2を貫く力と捉えている。現時点では、要素1「論理的・批判的思考力」及び要素2「問題発見解決力・創造力」の項目を育成したい思考についての項目として、要素3「メタ認知力」の部分を学習の振り返り活動場面で育成する力としてとらえ、未来思考科の授業開発を行ってきた。

## ②〈論理的思考モデル〉と〈10の考え方〉

本校では、見えにくい学力である「思考力」を見取るために、思考の枠組みを、ツールミンモデルの主張、根拠、理由付けの3つの要素をもとに〈論理的思考モデル〉(下記)を用いた。



次に、とらえた枠組みの中で働いている思考スキルを〈10の考え方〉を用いてとらえることで、生徒がどのような思考をしているのかを見取り、それを各教科の評価と指導に生かした。〈10の考え方〉については、教職員間で共通理解するだけでなく生徒にも示し、生徒が自らの思考を振り返ったり、課題解決の見通しを立てる際の手立てとすることができた。

<b>比較</b>	…複数の情報を比べて、共通点と相違点を見出すような思考スキル	<table border="1"> <thead> <tr> <th>考え方</th> <th>思考のキーワード</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>比較</td> <td>共通点は 相違点は</td> </tr> <tr> <td>分類</td> <td>この視点で分けると</td> </tr> <tr> <td>関連</td> <td>これらを関連付けると</td> </tr> <tr> <td>類推</td> <td>類似点から推測すると</td> </tr> <tr> <td>一般</td> <td>これらのことから</td> </tr> <tr> <td>具体</td> <td>例えば</td> </tr> <tr> <td>多面</td> <td>他の視点から</td> </tr> <tr> <td>統合</td> <td>合わせまとめると</td> </tr> <tr> <td>批判</td> <td>本当にそう言えるのか</td> </tr> <tr> <td>反証</td> <td>反対の例を示すと</td> </tr> </tbody> </table>	考え方	思考のキーワード	比較	共通点は 相違点は	分類	この視点で分けると	関連	これらを関連付けると	類推	類似点から推測すると	一般	これらのことから	具体	例えば	多面	他の視点から	統合	合わせまとめると	批判	本当にそう言えるのか	反証	反対の例を示すと
考え方	思考のキーワード																							
比較	共通点は 相違点は																							
分類	この視点で分けると																							
関連	これらを関連付けると																							
類推	類似点から推測すると																							
一般	これらのことから																							
具体	例えば																							
多面	他の視点から																							
統合	合わせまとめると																							
批判	本当にそう言えるのか																							
反証	反対の例を示すと																							
<b>分類</b>	…複数の情報を、一定の視点をもとにして分けるような思考スキル																							
<b>関連</b>	…複数の情報を、共通点などを見出し結びつけるような思考スキル																							
<b>類推</b>	…ある情報をもとにして、類似性のある情報を作り出すような思考スキル																							
<b>具体</b>	…抽象的な情報を、具体的な情報にするような思考スキル																							
<b>一般</b>	…具体的な情報を、抽象的で汎用性の高い情報にするような思考スキル																							
<b>多面</b>	…視点を変えるなどして、複数の視点をふまえて行う思考スキル																							
<b>統合</b>	…複数の視点に基づく情報を合わせて、新しい価値を生み出すような思考スキル																							
<b>批判</b>	…情報の正誤、確かさ、適否等について捉え直すような思考スキル																							
<b>反証</b>	…自分の考えと相反する例を想定し、考えを確かにするような思考スキル																							

全ての授業で、〈論理的思考モデル〉や〈10の考え方〉を用いることによって、生徒の思考を可視化・構造化し、その上で各教科の本質に基づいて本校定義の「思考力」を評価した。生徒の表現から思考を見取り、評価する流れは以下ようになる。

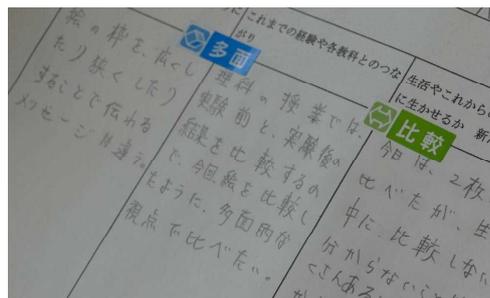
- ①〈論理的思考モデル〉を用いて思考の枠組みやプロセスを見取る。
- ②〈10の考え方〉を用いて思考スキルを見取る。
- ③ 問題解決過程を3つの視点から振り返らせる。
- ④「思考力」を3つの観点から評価する。



【資料1】〈考え方〉シール

この流れを踏まえることにより、各教科の授業において生徒の思考の「質」を見取り、それをもとに指導した。課題作成においては、生徒が用いるであろう思考をあらかじめ予測しておいたり、生徒の表現方法(使用語彙、話形、ワークシート)を工夫したりした。また、〈考え方〉シール【資料1】等を用いることによって、生徒自身が自分の思考をメタ認知できるようにした。

右の【資料2】は、ある授業において、生徒が学習のまとめで書いたワークシートである。このように、多くの生徒は、自身の学習を振り返る場面やレポートを書く場面で〈考え方〉シールをよく使う傾向がある。学習内容や見方・考え方を整理する、自身の学び方をメタ認知するこの行為は、後の学習に大変効果があると考えている。

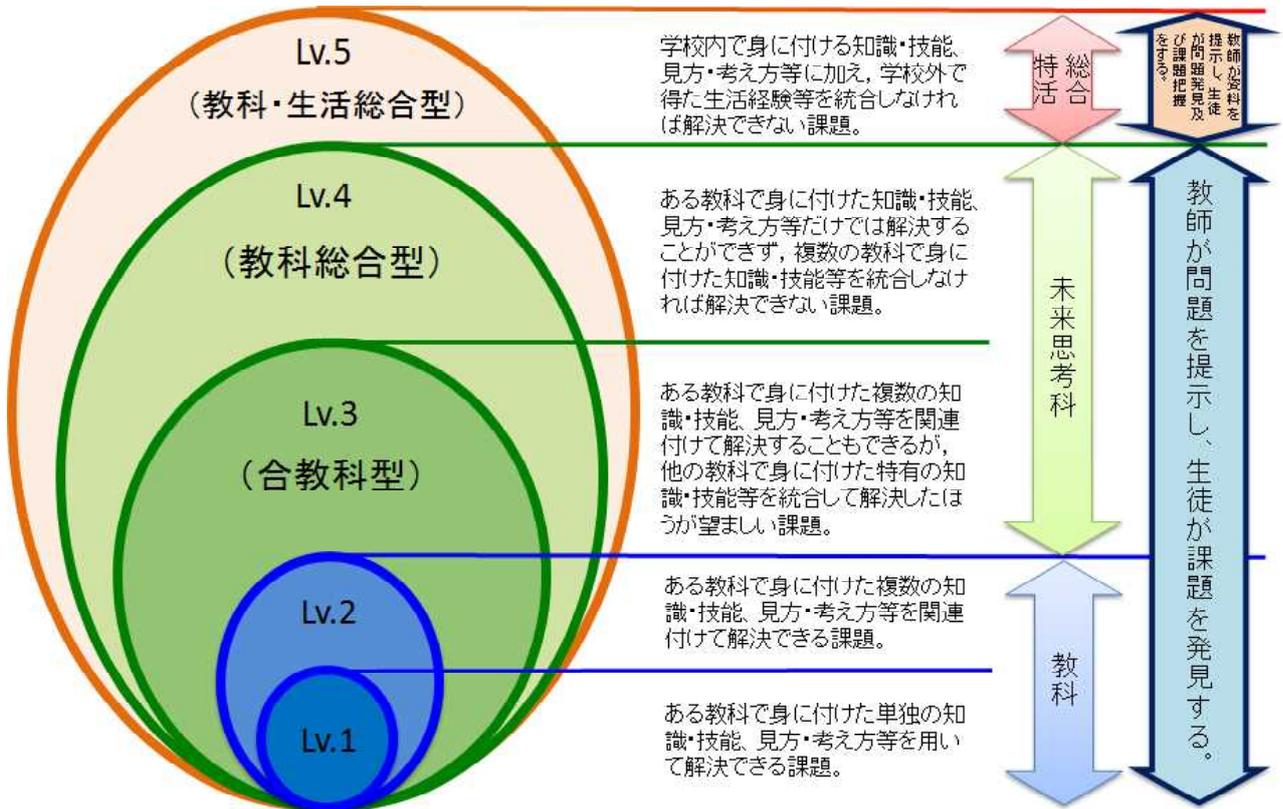


【資料2】生徒のワークシート

### ③ 学習課題レベルの設定

未来思考科では、現実社会に関するテーマを題材として、各教科等の見方・考え方を統合して働かせる教科等横断的な視点に立った学習課題を扱う。本校では、【資料3】のように学習課題のレベルを5段階に設定し、各教科では主にLv. 1～2、未来思考科では主にLv. 3～4、総合的な学習の時間・特別活動では主にLv. 5を設定するようにした。また、Lv. 1～4は教師が問題を提示し生徒に課題を発見させ、Lv. 5では教師が資料（データ・実態）を提示し生徒に問題発見及び課題把握させるようにした。

このようにレベルを設定することによって、教師が、各教科の枠を越えて、学習課題がどのような広がりや意味を持つのかが見えてくるようになってきた。



【資料3】教科等横断的に見た学習課題のレベル

### ④ 3つの視点による学習の振り返り

本校では、「思考・判断・表現」を中心にした評価を、ICEモデル (Young and Wilson, 2013) を参考にした3観点「知る・できる」、「つなぐ」、「生かす」で要素1～3を評価することにした。ICEモデルは一般的に、Ideas (考え) → Connection (つながり) → Extensions (応用・広がり) と思考の質の高まりを段階的に捉えようとする評価方法であるが、本校では、この段階を観点と捉えているのが特徴である。

知る・できる	つなぐ	生かす
<ul style="list-style-type: none"> <li>○各教科等で学んだこと（知識・技能や概念等）のより深い理解</li> <li>○各教科等では学んでいない新しい知識・技能や概念等</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○各教科等で学んだこと同士のつながり</li> <li>○未来思考科で学んだことと各教科等で学んだこととのつながり</li> <li>○未来思考科や各教科等で学んだことと実生活とのつながり</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>○未来思考科や各教科等で学んだことをどのように実生活へ生かすことができるのかの理解</li> <li>○未来思考科で学んだことから新たに生まれてきた課題の認識</li> </ul>

また、この評価の3つの観点は、生徒にとって学習の振り返りの視点にも生かしている。授業（小

単元末や単元末等)の振り返りにおいて、次のような問い方で振り返らせている。

<p>知る・できる</p> 	<p>つなぐ</p> 	<p>生かす</p> 
<p>「学習した内容（知識面や技能的なこと）はどんなことでしたか。」</p>	<p>「以前学習した内容や考え方のつながり（他教科とのつながり）は何でしたか。」</p>	<p>「学習した内容や考え方を、実生活や実社会にどのように生かすことができますか。」</p>

この3つの視点による学習の振り返りは、平成28年度から行っている研究であるため、生徒の「思考力」（主に、要素3「メタ認知力」に関すること）の育成にどのような効果があるのかは今後の検証が必要である。ただし、教師にとって、知識・技能重視の偏った学習指導に陥らない指導法になる可能性があると考えている。

次の【資料4】は本校が現在活用している「知る・できる」、「つなぐ」、「生かす」の3つの観点によるルーブリックである。単元計画表には、単元の目標に沿って具体的に記述するようにしているが、3つの要素の中に3つの観点があり、わかりにくい、評価しづらいという意見があった。今後は、【資料5】のように各要素のレベルで評価するような方法で整理したいと考えている。

身に付けさせたい資質・能力			観点		
			知る・できる	つなぐ	生かす
要素1 論理的・批判的思考力	(1) 比較・関連付けなど	ア 比較したり関連付けたりすることができる。	A 比較・分類・関連付け等の〈10の考え方〉を使って自分なりの思考及び表現ができる。	比較する対象を自ら抽出し、それらの共通点や相違点を考え、そこから分かることを類推することができる。	複数の具体例から一般的にいえることを導き、そのことがいっもいえるかどうかを演繹的に説明することができる。
		イ 組織的・体系的に考えることができる。	B 比較・分類・関連付け等の〈10の考え方〉の意味や目的を理解できる。	比較する対象の共通点や相違点を考えることができる。	複数の具体例から一般的にいえることを導き、そのことがいっもいえるかどうかを考えることができる。
	(2) 理由付けや判断力	ア 状況に適切な理由付けを行うことができる。	A 「主張」「根拠」「理由付け」を意識した思考及び表現ができる。また、判断の根拠を明らかにすることができる。	論証や証明と関連付けて、「主張」「根拠」「理由付け」を使って、論の構造を明確にすることができる。	論を構造的に捉え、不足する部分を指摘したり、補ったりして筋道立った論に修正することができる。
		イ 情報、証拠、見解を効果的に分析し、評価して判断することができる。	B 「主張」「根拠」「理由付け」の言葉の意味を理解できる。また、判断の根拠を明らかにする方法を考えることができる。	「主張」「根拠」「理由付け」を使って、論の構造を明確にすることができる。	論を構造的に捉え、不足する部分を指摘することができる。

【資料4】3つの観点によるルーブリック

身に付けさせたい資質・能力			到達目標の段階				
			1	2	3	4	5
要素1 論理的・批判的思考力	(1) 比較・関連付けなど	ア 比較したり関連付けたりすることができる。	・比較・関連付けの語句の意味を理解できる。	・共通点や相違点の語句の意味を理解できる。	・比較する対象の共通点や相違点を考えることができる。	・比較する対象を自ら抽出し、それらの共通点や相違点を考えることができる。	・比較する対象を自ら抽出し、それらの共通点や相違点を考えることができる。
		イ 組織的・体系的に考えることができる。	・具体の語句の意味を理解できる。	・具体例から一般的にいえることを導くなど、物事を抽象的に考えることができる。	・複数の具体例から一般的にいえることを導くことができる。	・複数の具体例から一般的にいえることを導き、そのことがいっもいえるかどうかを演繹的に説明することができる。	・複数の具体例から一般的にいえることを導き、そのことがいっもいえるかどうかを演繹的に説明することができる。
	(2) 理由付けや判断力	ア 状況に適切な理由付けを行うことができる。	・「主張」「根拠」「理由付け」の言葉の意味を理解できる。	・「主張」「根拠」「理由付け」を意識した考え方ができる。	・「主張」「根拠」「理由付け」を意識した考え方が表現ができる。	・「主張」「根拠」「理由付け」をロジックモデルの要素として使うことができる。	・「主張」「根拠」「理由付け」を使って、論の構造を明確にすることができる。
		イ 情報、証拠、見解を効果的に分析し、評価して判断することができる。	・類推の語句の意味を理解できる。	・類推を意識した考え方ができる。	・判断の根拠を明らかにする方法を考えることができる。	・三段論法の意味を理解し、自分なりの論を立てることができる。	・三段論法の意味を理解し、筋道立った論を立てることができる。

【資料5】段階によるルーブリック

## (2) 研究の経過

	実施内容等
第1年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 文部科学省『第2期教育振興計画』(2013.6), 国立教育政策研究所『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原則』(2013.3) についての共通理解を図る。</li> <li>・ 先行研究の分析を通して, 未来思考科を中心とする教育課程, 教育内容(目標, 領域, 指導項目), 指導・評価方法を開発する。 (先行研究: 井上尚美, 宇佐美寛, 西岡加名恵, 熊本大学教育学部附属小学校, 滋賀大学教育学部附属中学校, 関西大学初等部, 新潟県上越市立大手町小学校, 新潟大学教育学部附属新潟小学校, 新潟大学教育学部附属新潟中学校, 広島大学教育学部附属福山中・高等学校, 鳴門教育大学附属中学校 等)</li> <li>・ 1年次研究発表会 【午前中は教科ごとのテーマに基づく授業研究会, 午後は研究内容の説明と講演】</li> <li>・ 「思考力」を測る調査問題を開発する。</li> <li>・ 未来思考科の単元案を作成する。</li> <li>・ 新教育課程実施前の生徒の実態把握のために, 調査問題を実施したりアンケート調査を行ったりする。</li> <li>・ 1年次の取組をもとに, 次年度の移行実施のための教育課程を編成する。</li> </ul>
第2年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「思考力」や学習指導要領について分析し, 未来思考科学習指導要領(第1案)を作成する。</li> <li>・ 未来思考科を設けた教育課程を実施する中で, 実施上の成果や課題について検証する。</li> <li>・ 授業研究を通して未来思考科の授業の枠組みや授業内容, 評価規準等について, 検証する。</li> <li>・ 2年次研究発表会(中間報告会①) 【「思考力」を意識した各教科の授業, 未来思考科の授業の提案】</li> <li>・ 「思考力」を測る調査を開発・実施し, 生徒の実態把握を行うとともに, 調査問題の精度を高める。</li> <li>・ 未来思考科の補助資料集を作成する。</li> <li>・ 次年度の本格実施に向けた教育課程の検討</li> </ul>
第3年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 未来思考科を設けた教育課程を実施し, 成果や課題について検証する。</li> <li>・ 授業研究を通して未来思考科の授業内容をまとめ, 指導事例集を作成する。</li> <li>・ 3年次研究発表会(中間報告会②) 【未来思考科の成果を踏まえた各教科の授業, 未来思考科の授業, 指導事例集の提案】</li> <li>・ 次年度に向けた教育課程の検討</li> </ul>
第4年次	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 未来思考科を設けた教育課程を実施する中で, 実施上の成果や課題について検証する。</li> <li>・ 授業研究を通して未来思考科のルーブリック及びカリキュラムマップを作成する。</li> <li>・ 4年次研究発表会(最終報告会) 【未来思考科の成果を踏まえた各教科の授業, 未来思考科の授業, 学習指導要領案・教育課程案・ルーブリック・カリキュラムマップ・指導事例集の提案】</li> <li>・ 4年間の研究のまとめ</li> </ul>

### (3) 評価に関する取組

	評価方法等
第1年次	<p>研究事項・実践内容：①教育課程の開発 ②学習指導要領の検討 ③調査問題の作成 ④補助教材</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①～④について、年3回実施する運営指導委員会において専門家や行政、公立学校長などの委員の意見を参考にしながら、「これからの教育のあり方をふまえたものであるか」「思考力」を育成するために効果的であるか」「多くの学校で実践可能なものであるか」等の視点から検証する。</li> <li>未来思考科実施前の生徒の実態を把握するために、調査問題を用いた調査（第1～3学年）を実施したり、生徒、保護者、職員にアンケートを行ったりする。</li> </ul>
第2年次	<p>研究事項・実践内容：①未来思考科の授業の開発・公開 ②「思考力」を意識した各教科の授業の公開 ③教育課程(案)、未来思考科学習指導要領(案)の提案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①～③について、運営指導委員会や2年次研究発表会において専門家や行政、公立学校の先生方から、「思考力」を育成するためにふさわしい授業内容であるか(①)」「思考力」の育成が各教科の授業にどのような影響を与えているか(②)」「社会の変化に対応し未来を創造するために必要な「思考力」を育成するためにふさわしい教育課程、指導内容であるか(③)」という観点から評価をいただく。</li> <li>新教科「未来思考科」を通した「思考力」育成の効果を検証するため、12月に、第1年次に作成した調査問題を用いた調査（第1～3学年）を実施したり、生徒、保護者、職員にアンケートを行ったりする。</li> </ul>
第3年次	<p>研究事項・実践内容：①未来思考科の授業の開発・公開 ②未来思考科の成果を踏まえた各教科の授業の公開 ③指導事例集の作成・提案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①～③について、運営指導委員会や3年次研究発表会において専門家や行政、公立学校の先生方から、「思考力」を育成するためにふさわしい授業内容か(①)」「思考力」の育成が各教科の授業にどのような影響を与えているか(②)」「社会の変化に対応し未来を創造するために必要な「思考力」を育成するために、多くの学校で活用できる指導事例集であるか(③)」という観点から評価をいただく。</li> <li>新教科「未来思考科」を通した「思考力」育成の効果を検証するため、2月に、第1年次に作成した調査問題を用いた調査（第1～3学年）を実施したり、生徒、保護者、職員にアンケートを行ったりする。</li> </ul>
第4年次	<p>研究事項・実践内容：①未来思考科の授業の開発・公開 ②「思考力」を活かした各教科の授業の公開 ③学習指導要領、教育課程、ルーブリック、単元系統表、指導事例集の作成と提案</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>①～③について、運営指導委員会や4年次研究発表会において専門家や行政、公立学校の先生方から、「思考力」を育成するためにふさわしい授業内容か(①)」「思考力」の育成が各教科の授業にどのような影響を与えているか(②)」「社会の変化に対応し未来を創造するために必要な「思考力」を育成するために、多くの学校で活用できる指導内容・指導方法であるか(③)」という観点から評価をいただく。</li> <li>新教科「未来思考科」を通した「思考力」育成の効果を検証するため、7月に、第1年次に作成した調査問題を用いた調査（第1～3学年）を実施したり、生徒、保護者、職員にアンケートを行ったりする。</li> <li>4年間の研究の成果を、研究開発学校研究協議会において発表し、評価をいただく。</li> </ul>

## 5 研究開発の成果

### (1) 実施による効果

#### ① 生徒への効果

2月末に、質問紙調査を行った結果、次のような反応が生徒から見られた。

- ・ 3つの視点での振り返りは、学習の目的が分かり、どんどん発展できると感じる。
- ・ もし3つの視点がなかったら自分は分かったふりをしていると思う。視点があった方が自分の学びを深めることができる。
- ・ まとめのレポート作成は後輩のためにも今後も続けてほしい。
- ・ 総合的な学習の時間の個人レポートを書くときに、未来思考科の授業で習った〈10の考え方〉や図化の方法を生かすことができた。

調査テスト等による数値による検証は次年度の課題であるが、この調査結果から、未来思考科の授業が生徒の日常生活や各教科や総合的な学習の時間の学びにより影響を与えていると考えられる。

#### ② 教師への効果

3年次研究発表会（平成29年10月14日）を終え、参加者から次のような意見が出された。

- ・ 教科総合型でないといけないような内容、課題が考えられており、これから必要となる形だと感じました。
- ・ 今までに見たことのない形の授業で、新鮮だった。
- ・ 系統性、評価のあり方、知識技能など、教科化するには考えることがたくさんあるようですが、それらが整理されると、とても魅力的かつ可能性のある教科になるような気がしました。
- ・ 総合との差別化をはっきりとしていただけたら公立学校でもできそうな気がします。
- ・ カリキュラム・マネジメントをして時間を生み出し、取り組む価値があるなと思った。
- ・ 今後の総合的な学習の時間は、未来思考科のような取り組みをしていくべきだと思った。
- ・ I C Eモデルを参考にした3観点による学びの振り返りは、すべての教科で「振り返り」のどの場面で活用できます。
- ・ I C Eモデルの話は大変参考になりました。子どもたちが自身の学びをメタ認知し、他教科も生かせるのだと実感することは、まさしく社会に生きて働く力になるのだと思います。

また、本校の教師から次のような課題が出ている。

- ・ 単元を厳選してもよいのではないか。（生徒にとってより効果的であるものを残す）
- ・ 単元の時数を変更する。（実践を少し取り入れる） 4時間→6時間
- ・ 専門性の高くなる3年の授業ではT Tがよいのではないか。
- ・ T Tでやることで教師自身も教科等横断的な視点で授業を見ることができるのではないか。

現在、このような意見を参考にし、未来思考科の在り方を再検討している。

#### ③ 保護者への効果

現段階では、具体的な検証結果は出ていない。今後、アンケート調査を実施して分析を行いたい。

### (2) 実施上の問題点と今後の課題

現段階では、次の4点が今後の課題として挙げられてる。

- ・ 未来思考科学習指導要領を整理し、完成させる。
- ・ 単元系統表、ルーブリックの作成・改善を今年度中に行う。
- ・ 調査問題やアンケート調査の結果等から、検証結果を来年度前期までに示す。
- ・ 指導資料集を来年度前期までに作成する。

## 熊本大学教育学部附属中学校 教育課程表 (平成30年度)

	各教科の授業時数									道徳	総合的な学習の時間	特別活動	新設教科	総授業時数
	国語	社会	数学	理科	音楽	美術	保健体育	技術・家庭	外国語					
第1学年	132 (-8)	102 (-3)	135 (-5)	102 (-3)	44 (-1)	44 (-1)	102 (-3)	68 (-2)	136 (-4)	35	45 (-5)	35	35 (+35)	1015
第2学年	136 (-4)	103 (-2)	103 (-2)	138 (-2)	35	35	105	70	140	35	45 (-25)	35	35 (+35)	1015
第3学年	105	140	140	140	35	35	105	35	140	35	45 (-25)	35	25 (+25)	1015
計	373 (-12)	345 (-5)	378 (-7)	380 (-5)	114 (-1)	114 (-1)	312 (-3)	173 (-2)	416 (-4)	105	135 (-55)	105	95 (+95)	3045

※ 教育課程の基準からの変更部分はゴシック体で示し、括弧内に時数の増減を示す。

## 学校等の概要

### 1 学校名, 校長名

くまもとだいがくきょういっく がくぶ ふぞくちゅうがっこう  
 熊本大学 教育学部附属 中学校 校長 島谷 浩

### 2 所在地, 電話番号, F A X 番号

所在地 : 〒860-0081 熊本県熊本市中央区京町本丁 5 番12号  
 電話番号 : 096-355-0375 F A X 番号 : 096-355-0379

### 3 学年別・生徒数, 学級数

第 1 学年		第 2 学年		第 3 学年		計	
生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数	生徒数	学級数
160	4	159	4	157	4	476	12

### 4 教職員数

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭
1	1	1	1	0	18	0	1	0	0
講師	A L T	スクールカ ウンセラー	事務職員	司書	計				
3	1	1	3	1	32				